

大衆文学大系

監修 大佛次郎
川口松太郎
木村毅

講談社

9

白井喬二

直木三十五

大衆文学大系 9 白井喬二 直木三十五 集

昭和四十六年十二月二十日 第一刷

著者 白井喬二 直木三十五

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二十一 郵便番号一一二
電話東京〇三九四五一一二一（大代表） 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

◎白井喬二 植村清二 一九七一年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

白井喬二集

新撰組

五

直木三十五集

南国太平記

三

解説

六

解題

三

年譜

三

白井喬二集

新撰組

名人長屋の独楽造り甕八

一

安政五年戊午の五月のことであった。

江戸は浅草、お歯黒溝の近所に名人長屋というのがあった。

「明月やおはぐろ渡る甚五郎」などといってこの一棟の長屋からは代々奇妙に名人が巣立つので、誰よぶとなく、名人長屋名人長屋という習慣となつたのであった。何しろまだあの辺は開けなかつたもので、野放しの鶏がどこからとなく飛んで来て銅鶏に混るものだから、毎朝その羽数が違つていて本当に自分の家の鶏数を知っている者はまず珍しかったといわれた。この界限を一名山鳥町、お歯黒溝を草鞋堀などといって、どこまでも山野見立ての名がついていた位だから、よっぽど辺鄙なところ

だったに違いない。

ここに、この名人長屋に独楽作り甕八という者が住んでいた。これがまたこの名人長屋の名目を一人で背負つて立つほどの名人で、芸名但馬流甕八、その独楽作りの技術は一子相伝の秘法で、外に余芸として独楽使い四十八手中でも曲使いの十二手は素晴らしい。江戸人はこれを甕八の命独楽または羽独楽などといって大層珍重がったものである。

この甕八、今年取つてもはや五十八歳、まだ身体が使えなくなる年でもないが、何分永年の根仕事ゆえ急に弱りが出たものか、近頃めつきり億劫になつて、名代の命独楽も今では減多に使つて見せなくなった。

今日も今日とてこの甕八、午近くまで床の中でグウグウ朝寝をしていたが、何を思い出したか、「オオ」と呟くとムクリと起き上つた。長屋住いをしていてもさすがは但馬流甕八、夜具は絹紬の三つ布団、結構な綿がはいっているものと見えてふわり新膨となつてゐる。

床の上に胡坐をかけた甕八、

「織之助織之助」

と呼んだ。次の間というほどでもないが、褌襖の次が檜床の仕事場、居間の方が四畳半でこの仕事場が縦八畳の総床、床から天井まで独楽棚がビッシリ張詰めてあつて大小無数の独楽がのつたつてゐる。何のことはない人間の住居というよりか、独楽の住居といった方が早道なくらいだった。

今織之助と呼ばれて、

「ハイ」

と答えながらこの仕事場から出て来たのは甕八の伴織之助、年は二十一と見えるが独楽使いの伴としては初心初心しい瓜実顔、色が白いので芸事には一寸上品過ぎるが、近頃ではこの

織之助は父親の墨を摩して、江戸でもそろそろ芸人仲間の評判者となりかかっていた。

「お父様、なにか御用ですか？」

「ウム、今日は幾日だったかな？」

「幾日？ よく忘れるね、今日は五月の二十七日、晦日に近いけれど大分仕事が残りそうですぜ」

「まあ仕事なんかどうだっていい」 颯八は何か考えながら、

「織之助、まアそこへ坐れ」

「ハイ」

「二十七日ってことは俺も知ってる、ただ念を押してみたまでだ。ところでな織之助」

「ハイ」

「この五月二十七日って日はわしにとっちゃ大変な日だ、思い出せば随分古い話だが、今からちょうど足掛三十六年前、わしが今のお前の年と同じ二十二の今月今日だ。そうさな時刻も多分今頃だったかと思うが、おれもその頃は庄屋の家に生れて半刀御免の士分扱いだったが、国の暮しに飽きて何か生涯のいいことはないものかと、三七二十一日村の権現様に密そり願掛したが、その満願の日がそれ今日だ」

「へ、なるほど」と織之助は思わず蹶り出た。

「チャランチャランと鈴を振って不意と棧格子の手前を見ると、床の上に独楽が一つ乗っかってる、いいか独楽だぞ、この独楽が並大抵の代物じゃないんだ」

と但馬流颯八は自分の顔もこの時異様に莞爾つかせた。

二

「さアおれは驚いた。仕事授けにことを欠いて独楽とは何だ、権現様もあんまりひどい、何も今更独楽回しや独楽作りになる

くらいなら、庄屋の伴で暮らしていた方が幾ら気が利いてるか知れやしない、厭なこったとそのまま帰りかけようとしたが、その時そのまま帰ってしまったら俺も今のうちに但馬流の颯八っていわれるようになりはしねえ」

「へ、それからどうしました」と織之助も思わず後を催促した。

「でも氣に懸るので、一旦去に足の付いたのをもう一遍振り返ってみると、どうもその独楽が素晴らしいものだ」

「へ、なるほど」

「少し無ががっているが台尻が渦彫で脚が銀の丸延、総体にズツと古味が懸っていてイヤ素敵な品だ」

「へ、それからどうしました」

「まだその頃は独楽の鑑定は付かなかったが、こいつは面白い独楽だなと思ったら、さアそのまま帰ることが出来なくなつた」

「へ、じゃとうとう手に拾い上げたんで？」

「ウム、拾い上げたばかりじゃない、よくみるとますます古味を帯びた工合式から恰好までスツカリ氣に入ってしまったんだ、とうとう家に持って帰つた」

「エツ、じゃツマリ権現様の授かりものを有難くお受けした勘定になるんですね」

「まアそうだな」と颯八も苦笑して、「ところが持つて帰ってからが大変だ」

「へい、大変というところ？」

「その独楽っていうのがただの代物じゃねえ」

「ふうん？」

「御領主様の御闥門に当る実倉藤様というその頃大層御威力のあった御女性の方が掲げた献額の中の模造独楽だったことがわ

かったんだ」

「おやおや」

「群童闘戯の図っていう額で、独楽は本物の嵌込みとなつていたが、そいつがちょうど棧格子の上に懸つていて、それが満願の日にどうした機会かホロリと抜けて下に落っこちたもんだな」

「へ、妙なことがあるもんですね」

「うむ、何しろちやうど間拍子がいいもんだから、こつちはテッキリ権現様のお告げだとばかり思い込んだのだ。暫くするとそのことがバツと評判となつた」

「そのことという？」

「猥額の独楽を盗み取つた者があるつて噂だ」

「ああ、なるほど」

「この猥額を造つたのは伊勢路で有名な水正という彫刻師で、独楽は五代造りの逸品。五代造りというのはお前も知つてゐる通り、五代の吟味を経てから世の中に出したという請合独楽、廻転が一刻に一寸欠けるという品だ。さアそうだと分ると俺もビックリした」

「ふむ、そりや困つたらうね」

「困つた段じゃねえ。まだ若かつたから思案に尽きた揚句に、とうとう夜逃をした」

「ハッハ、夜逃は些と大袈裟過ぎる」

「イヤ笑いごとじやない、なるほど独楽盗賊の罰罪を蒙るのも恐かったが、それよりも驚いたのはこの独楽が肉独楽なんだ」

「肉独楽？」

「魂がはいってどうもただの木造りじゃねえ、そこで肉独楽、ずつと古い本に書いてある言葉だが、江戸に出てきて今日にいたるまで俺はこの肉独楽と相談して身の方針をきめてき

た」

「ふうむ」

「俺の一生ももうこれから先は花実の咲く気遣いもねえ、ちやうどお前と同じ年の今月今日この独楽を手に入れたのを因縁に、今日は一つその独楽をソツクリそのままお前に譲ることにしよう」というと、廻八はズイと立上つて押入の奥から取り出したのは五分板檜草帯で締めた一つの木箱であつた。

三

押入から木箱を取り出した廻八は織之助に向つて、

「さ、その独楽というのはこの木箱の中に納つてあるんだが、これを渡す前に一寸ばかり話すことがあるのだ」

「話すこと？ へえ承りましょう」

「外でもないが、ことによつたら、今日お前に二代目但馬流廻八を襲名させようと思うんだ」

「襲名？」 織之助も驚いて、「お父様、そんなことはまだ早い、第一お父様がまだそんなにピンピンしているのに襲名どころじやないや」

「イヤそうでない」と廻八は頭を振つた。「わしも近頃大分弱つた、朝起きがこゝ億劫になるようになってや人間ももうおしまいだ。そこで俺のいうことを聞いてくれ」

「へえ」

「お前にはもうこの廻八秘法の独楽作りの技から、四十八手の扱ひ、曲廻しの十二手までそっくりことごとく教えこんでしまったから、いつでも襲名には差し支えないが……実は今一つ譲る物が残つていたというのはつまりこの肉独楽だ」

「へえ」

「それを今渡すについて、今日はお前の身の行将来をスッパリ

きめてしまいたいと思うが、そのきめた工合で矢張り俺の商売通り独楽作りがいいとなれば、今日のうちにすぐ襲名を取り運んでしまつて、俺は今日から楽隠居になりていと思うんだ」

「身の行将来をきめるといふと？」

「さ、そこだ、先刻もいった通りこの独楽はただの独楽じゃねえ、肉独楽といわれるくらいでどうも魂がはいってる、彫刻師水正五代の魂がはいっているものか、それとも権現様の魂が乗り移ってるものか、どっちにしても不思議の働きのある独楽だ」

「へ、その働きというのはどんなことですか？」

「独楽占というのは昔からあるが、この肉独楽のはそんな生優しいのじゃねえ、わしが江戸へ出奔したのも、また江戸へ出て来てから源又という独楽作り師匠を取ったのも、その外今日まで毎日の身の方針がパッパッと片付いて来たのも皆この独楽のお陰だ」

「へへえ」

「わしはこれに四方占という名を付けてきた、それは願いの筋を東西南北の四つに切つてグルッと廻すと、この独楽が永廻りの揚句にトンと落ちる。これがどうも見事な落ちで、さすがは五代懸りの逸品、横になってからグラグラ動くようなことは決してない、このトンと落ちたところがそれ東か西か南か北かでチャンと占が立つんだが、それが三十何年間俺に一度もへまなことを教えてくれた例しがねえ、何せ有難い独楽なんだが……
ついでに織之助」

「ハイ」

「お前もズブの芸人なら何文句はねえ、すぐ襲名させてしまふんだが、仮にも庄屋の血統を受けて生れてきたからは先祖に対してもわしの一存にやいかねえ、それにお前の死んだ母親だっ

てもとは侍の落し胤だ、かたがたこいつアちやうどいい、この肉独楽の四方占、父親を助けてきたからは、件のお前にだつて占は立つ訳だ。同じ立てるなら始めてのことだから神前がいい、権現様ならお説き向きだがこの辺に権現様もなさそうだから観音様でいい、観音様は本店だ。出世前のお前にやちやうどうってつけ。さ、これからすぐあすこへ出懸けて行つて占を立ててこい。な、いいか」

「ハイ」

「東西南北を土農工商と割つて、独楽が南に落ちたら工だ、工なら独楽作りで一生を終ることにするんだからその時は今日すぐ襲名させてしまふ。いいか、まア一遍この肉独楽を見ていくか」

そういうと鰻八は、五分板櫓作り草帯の懸ったくだんの木箱の蓋を払つて中から取り出した異様の独楽一つ、なるほど古色鈍光を放つて重腹脚短の逸品だ。織之助も独楽は専門家だから思わず目を見張つて見惚れたがやがてキツとなった。

「ウン、お父様、おっしゃることはよく分りました、ではこれからすぐ一走り、観音様にお詣りして、独楽占を立てて参ります」

というと、自分でも急にその氣になったものか思わず意氣込んで外へ飛び出した。

四

織之助は、新吉原力仙町から二町、徳寺橋を渡つてどんどんやつて来たのは浅草観世音。その頃この近所に一の権現という小さい権現さまがあったのだが、鰻八も織之助もそれを知らなかったとみえて、権現様の代りに観音様を選んだ。

裏門から鑑堀をはいると蓮池があつて寄進の鯉が遊びでい

る。時刻はまだ午を一寸廻った頃だが天気がいよいよ大分人足を引いて境内はお祭日のような人出だった。

「ああどうも大層な参詣人だ。なんぼ父親の命令だからって、あの人中で鹿爪らしく独楽を廻すのは一寸気まわりが悪いな」

織之助も年が若いから本堂に群がる参詣人をみて思わず辟易だが、

「イヤそうじゃない、父親もああいい出したからには一生懸命だろうし、またこのわしにとっても一生涯の仕事選び、嘘でも本当でも父親がああ信じているからには、所詮この肉独楽の四方占とやらをして帰らなくちゃ納まるまい」

と決心したから唐金燈籠の横を通って十二段の正壇を上ると不淨消の大闢、中が拝み場で正面が文祿彫みの大賽銭箱、緑青文字で喜捨と崩してある。その前にズカズカと歩み寄った織之助は、もうこうなれば恥も外聞もない、懷を探って、用意の賽銭をバラリと投ると手に携げた例の独楽入の木箱をツトそこにひろげた。中から取り出したのは水正五代の肉独楽、織之助は心のうちで、

「南無観世音大菩薩、父の伝えにより東西南北四隅に象り、土農工商四階の仕事授けです、肉独楽の四方占今ぞ御照象あれ」

と念じながらトンと据えた心棒調べ。独楽さばきはお手のものだから棒頭の中心寸分たがわずツツと廻せばあら不思議、独楽も好し廻し手もよいからその廻ること、銀棒丸延の心棒は天地の正眼をビタリと指して、鵜の毛で突いたほどの狂いもなかった。みているとまるで廻転しているというよりか床板に突刺ってジツと止まっているかと思われるくらいだ、これは甕八遣鉢の十二曲のうち湖水止永廻しの一手である。別にここで曲芸を演じてみせるツモリはないが、何しろ真つ屋間賽銭箱の前で独楽を廻しているのだから誰の目だって止るわけだ、まして

物見高いは江戸の風習、さア織之助の後ろにはたちまち黒山のような人群りを築いて、しかもそれが黙っていないから大変だ。

「見なさい、床の上に独楽を突立てて何だか願を掛けているようだが、奇態な願掛けもあるもんだな」

「全く珍しい願掛けだ、ひょっとすると気狂いかも知れない」

「なぜ」

「女の名がおこまさんというので、つまり独楽を拝んでいるのかな」

「はっははは、地口の巧い人だ。それでは私も一つ、この願掛けとかけして将棋気狂いと解く」

「謎々ですか。その心は？」

「駒を見ると坐りこむ」

「な、なアるほど」

その頃の江戸人はだれも洒落が巧かった。野次の間に知らぬ同志で謎掛けをやっている、それを聞いてまた人々がドツと離し立てた。織之助ももう度胸が据わっているから賽銭箱の前にジツと踞座で独楽足の緩みを一心に見詰めていると、前にもいった通りこの肉独楽は一刻に少し欠けるというくらいな代物だ、その廻転の永いこと、見ているうちにやがて氣勢がスツと削げてきた様子、こっちは黒人だから見逃さない。

「オオいよいよ留りに近くなったな」

織之助は思わず形を改め心魂癡してジツと見詰めていると、果して歩みが止ったとみえて遽にトンと横に落ちた。

「オッ、東だッ、うむ東といえは士分！ そうか」

眩くが早いか織之助、何と思っただか、突然眼の前の肉独楽をグツと駕摺みにして立上った。ともう人群を、バタバタ掻き分

けながら、浅草観音の本堂を驚進に駆け下りた。

樹上の猿、樹下の侍

一

浅草観音の本堂をいちもくさんに駆け下りた織之助は、独楽占に「士分」と出たのでよっぽど面喰ったものと見え、どう道を取り違えたかフト気がつくといつの間に聖天町の通りに出て来てしまっていた。

「アア、こりゃ飛んだ方角にきてしまった、独楽使いの迷児なんてあんまりゾツとしない。オヤ？　ここは待乳山の聖天さんか、イヤ今日はばかに抹香臭いところに縁があるんだな」

眩きながらふと門を覗くとその門の両袂に歡喜天の木像が安置してある、仁王門に力入れ拔きの両仁王像が飾ってあるように、ここにも人体象面の柔和な火と草の両歡喜天が月輪を背中に背負って両門の脇番をしていた。

「ははア歡喜天か、歡喜天は仏像のうちでも氣のおけない相をしているな、これでも九千八百の大鬼王を家来にしているという偉い仏だから馬鹿には出来ない」

独り言をいいながら暫く木像を眺めていると、その時どうしたとか、急に門内にバタバタという入乱れる足音がして何かガヤガヤ罵り喚く人声が起った。織之助ヘテナと思ってそこを離れ首をかめて門内をヒョイと覗いて見ると、アツと驚いたのは境内の大銀杏の周囲をグルッと取巻いて場所柄に不似合の麻袴武家草履の侍がおよそ七八人、何か樹上にいるものと見え

て皆一斉に上を振仰いで、頻りと口々に饒舌り合っているのだった。

「ハテ可笑しいな、この辺に名の聞えたお屋敷もないが、いずれどっかの御家中に違いない。それにしても一体樹の上には何がいるのだらう？」

織之助も不審に思ったから思わず門内にズイとはいった。が、向うが武家だからやたらと傍に近寄る訳にいかない、敷石詰の御詣道に立ってくだんの大銀杏をジッと見上げると、頂きより二三本下の太枝の付根の間に何か黒い物が乗っかっていると見え、バサバサ、バサバサと動いている。見ているうちに、織之助は、

「ははア猿だな」

と思った。この猿という奴は怖えた時にはジツとしていることが出来ないもので、要領よく隠れるすべを知らない。それにしても、猿一匹にこんなに大勢の侍が総がかりになるといのは合点のいかない話だ。

「ふうむ、何しろ大袈裟な騒ぎだな、とにかく様子の分るまで今暫く見物していこう」

織之助もつい好奇心に駆られたから、そこに腰を落着けて様子をジツと見ていると、樹の下の侍は各自に血相を変えて、

「この上は止むを得ぬ一層射落すことに致そうか」

「イヤ猿を射落してもよいが、その途端に手にもつ香炉を取落すだらう」

「はて、それでは困るな、しからば生擒に致すより外に道はないが、生擒にしても矢つ張りその拍子に香炉を取落されたら同じことだ」

「いかにもそうだ、何にしてもこれは容易ならぬことが起きたな」

口々に当惑の溜息をついていた。その時この侍達よりやや後方に離れてジッと思案に暮れていた美服の堂々たる一人の武士が決心したもののカツと前に進み、

「ああこれこれ、猿はその借弓もて射落せ」

「ハッ、ではございますが」

「イヤ差し支えない、この鎌石の身を案じてくるるは有難いが、もはや決心致した、香炉を蹴った暁には鎌石屠腹して主君にお詫び致す、憎くき猿の仕業、差し支えない射落せ射落せ」

「ハッ」

と答えたが家来共は互いに顔見合せて誰も弓を構えるものがなかった。その様子を見てとった鎌石と名乗るくだんの美服の侍は所詮時が明かぬと思つたか、自らスタスタ前に進むと、樹の幹の向う側に立て掛けてあつた袋弓を、むずと握つてバラリと紐を払つた。中から取出した朱塗太藤の手弓、

「そち達射らずば、わしが射落して見せる！」

いうや否な白羽矢の早継い、キリキリキリと引き絞つて樹上にジッと狙いをさだめたから家来共は驚いてバラバラとその周圍に駆け集まつた。

二

美服の侍鎌石の周圍に駆け集まつた家来共は、口々に思わすわめいた。

「モシ、お早まり遊ばしてはなりません、暫く私共の申すことをお聞き下さい」

「イヤ止め立て致すな、そこ離せ」

「イニ離しません、もしあの猿をどうでも射落すがよいとあれば、何であなた様の手を勞わしましょう、私共の間にて必ず処置致しますれば何卒暫くお手をお引き下さい」

「なに、そち達で射落すと申すのか」

「ハイ」

「ふうん？ では早々に致せ、借弓なれどかなりの強弓、相手が猿なりとて油断いたすな」

「ハッ」というと一人の家臣が、まず急いで鎌石から弓矢を受取つた。そして、段々渡しにそれを後方に引つ込めながら、

「が、今一応御熟慮を煩わしとう存じます」

「これ、余より弓を奪い取つておきながら、そち達はまだこの上に止め立て致すつもりか」

「止め立てと申す訳ではございませんが、あの香炉と申し、またその香炉を掠め取つて逃げたる悪戯者の猿と申し、いずれも由緒のあるもの」

「ナニ？ あの猿に由緒があると申すのか」

「ハイ」

「たわけを申せ、なるほど香炉は我主君立花左近様、將軍家より鑑定調査方御下命あつた大切の古代青磁石鑲の宝物、今日この鎌石策之進主君の代理を承つて聖天町福寿院法主通榮導師殿の許に右宝物鑑定のために罷越したことは実証だ、なれど、それを奪い取つて逃げた猿までが由緒ありとは何を申すか。退れ退れその弓をここへ出せ」

「イニ御立腹は御尤もでございますが只今奥の院にて承りますところによればあの猿こそは、御公儀御隠族に渡らせらるる東叡山御本坊御隠棲の陽正尼公より通榮導師へ御預けになったる長尾白足の野猿と申すことでございます」

「え、御本坊の陽正尼公よりと？ フーム」といったきり鑑定の使者鎌石策之進もグツと詰つた。聞かぬ先ならともかく、陽正尼公愛無の預け猿と聞いたらそれでもなお弓を引く訳にはいかなかった。イヤ、こうなると香炉も大切だが、猿も減多に手

荒な真似は出来なくなつてしまつたから、ただ空しく大銀杏の梢を仰いで猿と香炉の張番するより外仕方がない始末だ。

その時家来の一人が前に進み出た。

「申し上げます」

「何じゃ」

「なお承るところによりますれば、かの野猿は非常に怜悯発明にてよく人意を解します由、つきましてはここに一つ御献策がございます」

「オオ何かよき思案があると申すのか、あらば遠慮なく申ししてみよ」

「ハイ、これは元より実矢を放射^{はな}ましてはよろしくないと存じますが、矢番^{やばん}の形を示してあの樹上の野猿を脅威^{おそ}みましてはいかがかと存じます」

「フム」

「さすれば元々怜悯なる獣のことなればかの宝器を持ちたるま樹上より下りて参るかも知れませぬ」

「なるほどそれもよからう、では誰か弓をとつて處狙^{ところねら}い致してまい」

「ハイ」というと一人の家来、くだんの朱塗太藤の手弓をとると幹下の土をトンと蹴つてキリキリッと引絞つた天井狙いピタリと大銀杏の猿の面上を狙つたから堪らない、樹の上ではキキイッキキイッと驚声を放つて遽に周章騒々様子であった。が、どうも物事というものは都合よくいかないもので、その野猿坊が香炉を持ったまま下において来てくれれば何の文句もなかったのだが、惻いといつてもそこまでの分別はない、香炉さへ返せば命が助かると思つたものか、手に握つていた古代青磁石鏝^{いせ}の香炉を下を目懸けて颯と投つた、それが運悪く取巻の侍をズツと離れた敷石段の真つ只中であつた。

三

貴重^{きこう}の香炉は、アツとみる間に敷石段の上に落つちてあわや木っ葉微塵に碎けたかと思つた時、今までの一伍仔什^{いちごし}を同じ敷石段の上で飽かず眺めていた独楽作り織之助、

「ヤツ」

というと思わず前に跳り出た。姿勢は膝頭の両手揃い、ちやうど独楽捌きそのままの手で以てトンと受取めたのは敷石からやつと一尺と離れないところだつた。その危険いことは間一髪、平常の芸が役に立つて計らずも香炉を救い止めたが、自分でもビッシヨリ全身に汗を掻いた。

その時アレヨアレヨと眺めていた侍達は、やつと我に返つてバラバラッと織之助の傍に走り寄つた。

「オッ、今受止め下されたは、こ、香炉ではござらぬか？」

「ハイ確かに香炉、折よく受け止めました」

「エッ、では矢つ張り、うむ、そ、それは忝^{かたじけ}ない」侍共は迂路

迂路と声を纏らせて、

「オオ、その香炉こそ、只今お聞及びの通り身共主人の所持品、さきその品どうぞ御手渡し願いたい」

「アアこれこれ、者共その仁に粗忽あつてはならぬぞ、退け退け」

といいながらそこへズカズカと進み寄つたは本日の鑑定使鎌石策之進、家来を追い退けておいて織之助の前に到ると麻結の膝まで手を卸して、

「これは始めて御拝を得ます、拙者は立花左近の家中鎌石策之進、いずれの仁かは知らぬが身に降りかかる唐突の難儀、万事休すと見えた時計らざる御助勢によつてそれなる器物お救い下されたは、身の無事御家の安穩はさることながら、お

手並のほどホト感動仕った、いずれはお嗜み深き知名の方と存する、何卒お名明しに預かりたい」

策之進の考えでは香炉を受取めたのは武芸の手と思った、それゆえあの咄嗟の場合地上一尺のところではヨイと掬い止めたのは並々ならぬ腕前、もしかすると世を忍ぶ達人高名の士かも知れぬと思ひ込んだのは無理もなかった。

さアこっちは織之助、こう切口上でましく立てられると大いに面喰って、

「へえ、どう仕りまして、何怪我の功名、そうお礼をお返しやられてはかえって痛み入ります、じゃこの香炉はお返し致します」

「イヤ、御謙譲のほどますます敬服仕った、だがこのままではその香炉はいかにも受取り難い、是非お名明しに預かった上のことに致したい」

「へえ」

「さ、御迷惑でも是非一応お名乗りくだされたい」

「や、どうも困ったな、名乗らなきやこの香炉が受取れないとおっしゃるんじや、私も当惑するから、では申し上げましよう」

「オオそれは忝い」

「この裏のお齒黒溝の近所に住んでいるケちな芸人で、但馬流

毘八、私はその伴の織之助と申します」

「オオ毘八？ では江戸で名代の独楽使い毘八殿の御息か」

「へえ左様です」

「ウム、なるほどなるほど、さすがは芸道の高名者、アア何事も名人となればまた偉いものだ」鎌石策之進つくづく感心したが、「イヤ、これは路上お名明しを強い誠に失礼仕った、御尊父毘八殿にもお目に懸り篤く御礼申し上げたいが、今日は主

人代理公務半ばのことなればいずれ御館には改めて参上致す」

「へえ、御館は恐れ入ります、ナニももうここぞ沢山で、殿様方にお越し願うような場所柄じゃございませんで……じゃこの香炉どうかお納めなすっておくんなさい」

織之助は策之進に香炉を渡すとはうほうの体で待乳山聖天の境内を抜けてドンドン家に帰って来た。

四

お齒黒溝名人長屋の自宅に急いで帰って来た織之助、

「お父様只今帰りました」

「オオ帰ったか、大層長かったじゃねえか」

「エエ一寸廻り道したもんだから」

「そうだろう、観音様の独楽占を略と一刻と見ても後先が少し長過ぎた、その代りその間に部屋の中はスカリ掃除をしておいた、今桜の塩湯を入れるからまアここへ来て憩んだらいいだろう」

「エエ、何でもいから一杯呑みたい。外を歩いて来たら馬鹿に咽喉が乾いた」

「さ、少し熱いかも知れないがこの桜は日光様の帰りに花川戸の応一さんが買ってきてくれた本場物だ、今日は外ならぬ日だからこれを呑みながら話をしよう」

「じゃ頂きます、なるほどこいつア味がいい」

「ハハ、そうガブガブ呑んじやいけねえ、桜湯にも少しは作法つてものがあらア」

毘八は笑いながら織之助の粗野を論めたが、やがて恬然となつて、

「時に織之助、どうだった独楽占の様子は？」

「へえ」

「その水正五代の肉独楽の占ってくれることに滅多に間違ひはない筈だ、何と出たって仕方がねえ、士農工商の四階の示しは何と出た、え？」

「へえ」

「工か商か、まずその辺だろう、どうだった織之助」

「お父様、それが少し違いますんで」

「ナニ違う？ ふん、違うというところどう違うんだ」

「東西南北のうち、独楽は東に落ちました」

「エッ東？ 東といや、し、士分じゃねえか」

「へえ」

「オオ士分と出たか、ふうん！」

颯八はそのまま押黙って暫時腕組をしていたが、やがてグツと勢いよく頭を擡げた。

「イヤ、よく分った。なるほど士分と出たか、どうせ男一匹の生涯だ、独楽使いで送るより士分で送った方がなんぼ花々しいか知れねえ、こいつアいいもんが出てくれた」

「お父様お父様」

「それに御治世も大分移り変った、今時もう独楽使いでもあるめえ」

「お父様お父様、独楽占いに士分と出たからってどうせ芸人が侍になれっこはない。私はやっぱり但馬流織之助で結構なんです」

「馬鹿いえ、この肉独楽に間違ひはない、わしも二代目颯八の襲名は今日でブツツリ思い断った。その代りこの肉独楽だけは今日からお前の手に譲るから、そのつもりで大事に蔵っておいてくれ」

「へえ」

「お前は身に経験がないから、この肉独楽の有難味はまだ分る

まいが、俺はこの独楽のいいなりに世の中を過ごして来たようなものだ。粗末に取扱っちゃいけないえ、いいか」

「へえ」

そこで颯八は改めて伴織之助に水正五代の肉独楽を箱総み渡してしまおうと、やっと安心したようにホッとして、

「寄道したってのはどこへ行ったのか？」

「へえ、それが可笑しいんで、つい人群を駈け出したもんだから、面喰ってしまったてあれから聖天町通りに出たんで、仕方がないから待乳山聖天を抜けてグルッと大廻りして帰って来たんですが、その境内で飛んだ騒ぎに遭遇してね」

織之助はそこで、立花左近の家臣鎌石策之進が鑑定持参の宝物古代青磁石鏝の香炉を猿に奪われアワヤ木葉微塵に破壊かれようとした危機一髪のところをうまく受止めて救った話をする

と、颯八はボンと横手を擡った。

「それみろ、もう験が現われてら、その鎌石策之進という侍は幕党の浪人係として鬼之進などといわれる今著名の方だ」といふと思わず莞爾した。

鎌石策之進の来意

一

さて、このお齒黒溝傍の名人長屋は六軒続きの二棟で、真ん中に撥釣瓶の井戸があって長屋中で使うものだから、朝から晩まで八盆しくギイギイ鳴っていた。それを五月颯がってズツと前に住んでいた融市という変人の建物師が「音打の仁王」とい